『東京大学新聞』（週刊）第2264号、2004年7月13日、p.3.

パリに見る

海外の魅力

ギャップ楽しむのが異国都市の魅力

今橋 映子（いまはし えいこ）助教授
（総合文化研究科）

都市には、訪れてこそ実感できる魅力がたくさんある。夏休みには海外都市に出かける計画を立てている人も多いだろう。そこで今回は、海外都市の魅力について、パリと東京を題材に都市の文化を研究している今橋映子助教授（総合文化研究科）に話を聞いた。

●都市の魅力

都市には、周辺地域の文化がすべて集中する。実際にその都市に出かけて街を歩くと、その都市固有の文化を肌で感じることができるという。「都市がもっている景観や価値観、生活習慣を体験することは、実際に訪れることでしかできない体験です」と今橋助教授は語る。実際に都市を訪れることで、様々なメディアを通して作り上げられたその都市のイメージが、町並みや、使われている言葉など様々な面で食い違うことに気づくことができる。「このギャップを楽しむことも、都市を訪れたときには必要ですね」

●パリの都市としての魅力

今橋助教授が主に研究対象としているパリも、都市としての魅力を存分に兼ね備えている。たとえば、パリ市内にはカフェやパン屋が多く、パリの食文化に気軽に触れることができるという。また、様々な人種の人々が暮らしていながらも、人種差別はそれ程顕著だったわけではないという歴史を持つため、都市生活が発展していた都市の中でも、パリはとりわけ、人々の間に適度な距離が保たれているという。「馴れ馴れしいわけでも、かといってそっけないわけでもなく、大変過ごしやすいんです」と今橋助教授は語る。

●日本とパリの関係

現在でこそ多くの人が海外旅行先や留学先としてフランスを選ぶが、昔から人気があったわけではない。明治維新期の日本は政治、経済の面でそれぞれドイツ、イギリスを手本としており、普仏戦争で負けて政治的地位の低かったフランスのことはそれほど重視していなかった。しかし、1899年のパリ万国博覧会を機に、日本はフランスを文化発進の国として注目するようになり、哲学や文学などにフランスの文化を取り入れようとする動きが広まった。

1900年代当初、日本からフランスに渡る留学生は、文部省から送られたエリートが中心であった。しかし1920年代に入ると、画家や音楽家など幅広い層の人々が留学するようになる。今橋助教授はこう分析する。「フランスは伝統があり、知の蓄積に長け、情報を公開するセンスが優れています。図書館、美術館が充実しているため、留学先として最適だったのでしょう」

●現代におけるパリ

「しかし、19世紀植民地帝国であったパリの歴史的裏面を忘れてはいけません」と今橋助教授は言う。その影は21世紀の現在、多くの外国人移民との共存の難しさとして、特にパリの場末や郊外で深刻な問題として表出しているという。その一方でフランスの文化行政は、「パリ」とその文化を有効に演出する技にも長けており、それが文化保護につながっている。「単なる観光地としての憧れから、遠く離れた多文化共存時代の文化都市の在り方として、パリは今後も日本人にとって目を離せない場所であり続けるでしょう」

気で家族と仲良くなれた。10日間なんてあっという間。日本に帰りたくなかった。

短期間でも、フィリピンに行って現地の人と触れ合ったことで、以前自分が東南アジアの貧困層の人々に対して抱いていたネガティ

ばっってつけた。バックパッカー、ボランティ験……と、一度は経験してみたい「変わり種」集する。そもそも人を旅行に駆り立てるのは何か、また、海外に行くことの意義はどこにある「観光心理学」のパスポートを手に、これであも今年は海外マスター！